

総合科学研究所だより

Research Institute of Integrated Sciences and Humanities

巻頭言

総合科学研究所主任 吉川 直志
YOSHIKAWA Tadashi

「鉄腕アトム」や「ドラえもん」など、子どものころ見たアニメや映画の中では人工知能（AI）を搭載したロボットが活躍し、私たちは遠い未来への夢と希望に思いを馳せていました。ロボットが人を助け、人間にはできない仕事を代わりにし、そして「ドラえもん」のように友達として一緒にいてくれる。近年、そのような想像が現実味を帯びてきました。AIによって私たちの生活は大きく変わろうとしています。一方で、AIの進歩は凄まじく、オセロ、囲碁、将棋などで人間に勝つことも当たり前、人はAIには敵わなくなるのではという恐れも出てきました。近い将来、AIが人の代わりに仕事してくれる。つまり、仕事の多くがAIに奪われてしまうと言われていきます。便利な暮らしと引き換えに人間の仕事が徐々に減っていく社会で、私たちはどうすれば良いのでしょうか。

これから、教育が更に重要になってきます。人間がAIを使うための教育が必要です。そのために小学校では「プログラミング教育」が始まります。しかしそれだけでは不十分ではないでしょうか。人間の教師が人間の「生きる力」を育てる教育がこれまで以上に求められることになります。「発想力」「感性」「人と人との関わり」といったAIでは難しい部分を磨かなければいけません。AI社会の中で「生きる力」。大学での教育もこうした力が身に付けられるように行われています。

総合科学研究所でも、「発想力」「感性」「人と人との関わり」についての研究や事業が行われています。また、新たに音楽や身体表現により「感性」を育てる二つのプロジェクト研究が採択され、これらの研究が未来の社会で「生きる力」につながっていくものと期待しています。「ドラえもん」のいる、子どものころ夢見た未来の生活に向けて、これからも研究を続けます。総合科学研究所の研究や事業にこれからも期待して頂き、ご理解とご協力を頂きますようお願いいたします。

平成30年度「開かれた地域貢献事業」報告

短期大学部生活学科：石崎恵智利・武岡さおり・原田妙子・阪野朋子・松本貴志子・森屋裕治・山田勝洋

短期大学部保育学科：河合玲子・島澤ゆい・白石朝子・村松麻衣

家政学部食物栄養学科：伊藤美穂子・片山直美・近藤貴子・田辺賢一・辻美智子・山田久美子・山中なつみ

文学部児童教育学科：渋谷 寿・坪井真里子・豊永洵子・堀 祥子・村田あゆみ・吉川直志・吉田 文

名古屋女子大学同窓会「春光会」：千葉史子・吉田嘉子

本研究が推進する「開かれた地域貢献事業」は今年で12年目となり、年々発展を続けてきました。地域の公共施設である名古屋市の瑞穂児童館、瑞穂保健センターとの交流事業に加えて、今年から瑞穂区役所との連携事業もスタートし、平成30年度を無事終了しました。

瑞穂児童館との交流事業は、保育・教育、栄養・生活関係で12の講座と、児童館クリスマスイベントで5つの企画を行いました。クリスマスイベントは地域の恒例行事となり、多くのご家族が楽しい休日を過ごしました。瑞穂保健センターとの交流事業では、一般介護予防事業として「若返りきらきらセミナー」という愛称のもと、認知予防、運動、栄養、口腔にわたるテーマで、5つの企画を行いました。さらに、今年からスタートした瑞穂区役所との連携事業

では、働く女性の支援を目的として、「育休復帰応援講座 時短レシピでクッキング!」を開催しました。育休復帰予定の方々に、調理時間の短縮につながる献立の説明や調理実習を行いました。

これらはいずれも、家政学部食物栄養学科、文学部児童教育学科、短期大学部生活学科・保育学科の教員と学生の有志、春光会、および総合科学研究所の教職員が協力して実施したもので、多くの方にご参加いただきました。今後とも、地域の方々と触れ合う機会を多くご提供し楽しんでもらい、またこれらの事業に関わる学生たちが実体験を通じて成長する場面を多く提供すべく、取り組んでまいります。

(文責：森屋裕治)



オリジナルシリアルバー作り



木材(ヒノキ)を利用したおもちゃ作り

クリスマスイベント
みんなでクリスマスを楽しみましょう!

時短レシピでクッキング

機関研究

「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

～女子教育の継承—戦前から戦後へ—

佐々木基裕(代)・河合玲子・杉山実加・遠山佳治・豊永洵子・藤巻裕昌・三宅元子・吉川直志・吉田文

本研究は平成28～30年度の3年を期間としており、本年度は3年目に当たります。越原春子先生の建学の精神、教育の理念を女子教育史の中に位置づける共同研究と、それを視野に入れた各メンバーの専門分野に基づいた個人研究の両面から、集大成となる総合的な研究としての検討を進めています。

共同研究においては昨年度に引き続き、『学園七〇年史春風』（1985年）以降の学園の沿革をたどる作業として、本学関係者へのグループ・インタビューを行いました。これまでに整理してきた

フォーマルな歴史とあわせて、より精緻な女子教育史の叙述を目指しています。

個人研究に関しては、毎回2名ほどの担当者が、専門性に基づいた研究報告を行いました。戦前から戦後へ至る時期の教育界における女子教育の位置付けについて、教育学、歴史学、音楽学、体育学、社会学等の多様な観点を総合し、学際的な研究を進展させています。

(文責：佐々木基裕)

機関研究

「大学における効果的な授業法の研究8」

～本学における効果的なアクティブラーニングの開発～

三宅元子(代)・市村由貴・河合玲子・佐々木基裕・渋谷寿・白井靖敏・杉原央樹・竹内正裕・遠山佳治・羽澄直子・服部幹雄・野内友規・山田勝洋・吉川直志

本研究は、今年度から3年間「大学における効果的な授業法の研究8」として、学生における効果的なアクティブラーニング(AL)の開発を行っています。初年度は、「ALとは何か」について資料に基づいて研究員で議論し共通認識をした後、ALを活用し各自が取り入れた授業実践について報告しました。

ALは、講義法の課題を補完する方法・手段であることはいうまでもありませんが、これを取り入れる時には、質の高い学習につながるように学習活動を設計し、実際に学習の質が高まっているかを

確認する必要があることを共通認識しました。その後、各研究員がALを取り入れた授業を実践し、1回の研究会ごとに2人が報告しました。これまで3回で6人が発表し、実践をもとに意見交換をしました。

次年度も、引き続きALを取り入れた授業の実践報告やテキストを用いて研修を行い、研究内容の理解を深めるとともに、学会や研修会に参加し情報を収集します。

(文責：三宅元子)

機関研究

「幼児の才能開発に関する研究」

～豊かな感性の獲得—環境を工夫することを通して—

幼児保育研究グループ

今年度は「豊かな感性の獲得—環境の工夫を通じて—」を主題として、環境としての「自然環境」と「遊びの環境」における子供の育ちに注目してその経過を捉えています。

「自然環境」としては、3歳児のカタツムリの飼育や4・5歳児の昆虫飼育を継続して行うことから推察される子供の育ちについて注目しています。また、「遊びの環境」としては、4歳児では、廃材工作での取り組みの中で、子供自ら創意工夫する姿の変化や5歳児

の、遊びの環境づくりの一つとして導入した遊具の遊び方の発展に着目して観察しています。子供がいきいきと自らの気持ちを高め集中して取り組める遊びの環境は、教師と子供が相互に関わりながら様々な形で発展します。その過程の観察から、子供の育ちを明らかにしたいと考え進めています。環境の捉え方を自然から遊びまで幅を広げたことで、子供たちがより豊かな関わりを持って活動に取り組めるようになってきたことを感じています。(文責：森岡とき子)

機関研究

「食と健康に関する研究」

駒田格知(代)・伊藤美穂子・大曾基宣・小椋郁夫・高橋哲也・田辺賢一・山中なつみ・山田久美子

本研究会は「総合科学研究所」の機関研究として昨年度4月に発足し、本学の教育・研究の柱の一つの分野として、全学部の教員によって「食と健康」というテーマで研究を進めております。初年度は、食と健康の主要な要素である消化器系の入り口である「口腔」に着目して、食べ物を噛むこと、すなわち咀嚼の意義について追及してきました。そして、その内容を一生のうちで最も重要な時期だと思われる幼・小学校の教育に反映していただくことを目的と

して、教育現場で役立ててもらいたいとの願いを込めて、食育冊子を作成し、配布することを決定しました。この流れを受けて、本年度は、「冊子をつくる基本的な考えを議論することから始め、各研究員の専門分野を十分に反映させ、しかも小学生がきちんと理解できる表現をする」ことに全力を注入し、様々な領域の研究員が協力して執筆を進めました。現在、印刷工程に入っており、本年度内には完成する予定となっています。(文責：駒田格知)

プロジェクト研究

「近代日本における音楽教育の変遷をふまえた今の日本に必要な音楽・音感教育のあり方」

稲木真司(代)・佐々木基裕

現在日本の教育分野において、新しい学習指導要領への移行が行われているところです。小学校における完全実施は2020年となりますが、それに向けて音楽教育の分野でも新しい学習指導要領に即した教授法やアプローチが研究されています。日本の音楽教育は主に明治維新後に始まりましたが、これは欧米における西洋音楽を取り入れる形で行われました。その後、2度の世界大戦を経て、日

本の音楽教育は世界的にみても特殊な変化を遂げています。

日本では絶対音感に対する特別な認識があり、それが音楽教育や音感教育に大きな影響を与えています。絶対音感は本当に「音楽家に必要なもの」あるいは「すばらしい能力」なのでしょうか。本研究を通して、日本人の音感の捉え方について、また音感教育の現状について調べたことを現在まとめています。(文責：稲木真司)

プロジェクト研究

「子どもの表現と創造性を育むアート教育の指導法の開発Ⅱ」

本研究では、感性豊かな子どもを育むための教育的プログラムの開発を目指し、「子どものアート教育」という視点から、造形表現と音楽表現の垣根を越えた「表現」領域の指導法を研究しています。2年目も終盤を迎え、昨年度末に開発したワークブックの検証、教育効果を分析しています。ワークブックは、改訂版を作成する予定ですが、ワークブックを通して、どのような子どもたちを育てる保

松田ほなみ代・伊藤理絵・河合玲子・神崎奈奈・白石朝子・山本麻美
育者を養成したいのか、十分な話し合いを行い、研究を進めます。ワークブックには、乳児保育の視点から保育における表現の根本を捉え直し、反映させることを目指したいと考えています。乳児保育の3つの視点および5領域についてのねらい及び内容や幼児の発達と関連させた、表現活動の特徴や面白さを確認し、応用や発展を重ねることができる、指導法の開発を目指します。(文責：松田ほなみ)

プロジェクト研究

「幼児教育の5領域を主題とする「つくる、たべる、おしゃべりする」対話型ワークショップデザインの実践的研究」

本研究は、幼児教育における5領域をメディアとするコンテンツを用いたワークショップを通して、現代社会における暮らしを見つめなおし、生きる力の源泉となる知恵を共有、地域で主体的に生活を陶冶する場を形成することを目的とした実践的研究としてスタートしました。「人間の生活における本当の豊かさとは」について問かけや対話の方法を検討するため、夏にはこの地方の人々の暮らしと食文化について調査に出かけました。

調査の内容を踏まえ、2月9日に開催した瑞穂児童館との共催事

堀 祥子代・村田あゆみ・阪野朋子
業「みんなで笑顔になっちゃおう！お絵かきモーニングトースト作り」では、「つくる、たべる、おしゃべりする」をキャッチコピーに、参加者同士およびゼミナール所属の学生も交えて活動を共にすることで、対話を通じて暮らしや人間関係の豊かさについて思考する機会となりました。今後は研究メンバーでアンケートや活動の記録物、学生から集めたエピソードを元に対話型ワークショップデザインとしての効果を検証していきます。(文責：堀 祥子)

プロジェクト研究

「一汁一菜の献立に関する栄養学的分析と持続可能な食生活へのアプローチ」

近年、家庭における調理時間は短縮傾向にあることから、料理研究家により、一汁一菜の献立で栄養バランスをとることが提案されました。しかし、一汁一菜の献立は、必要な栄養素や食材を摂取することが容易ではないとの指摘もあり、一汁一菜の実用性については詳細に検討する必要があります。これまでの調査において、高校生に一汁三菜と一汁一菜の献立作成を行わせたところ、一汁一菜の方が続けて実践できると認識されました。そこで、本研究では、家

阪野朋子代・瀧日滋野
庭の食生活において実用性を検討するため、調理を担当している者を対象として、一汁一菜の献立に関する調査を実施しました。現在、献立の栄養学的な分析や献立作成についてのアンケート結果の集計を行っています。調査から家庭での調理の実態を把握するとともに、栄養バランスを考えた一汁一菜の献立作成の留意点を抽出する予定です。

(文責：阪野朋子)

平成31年度プロジェクト研究

「幼児の音楽感受と身体表現」

本研究は幼児の音楽感受能力と身体表現活動の相互性に着目し、音楽の聴きとり、感受・知覚能力と身体表現力の結びつきを、実践を通して明らかにすることを目的としています。幼稚園をはじめ保育の現場では、明治以降の唱歌遊戯に起点をおく「振り付け」による音楽表現が多く行われています。音楽を「振り付け」ではなく、音楽そのもののイメージを個々が表現する実践を

坪井眞里子代・眞崎雅子・伊藤充子
行い、拍・リズム・強弱・音色・フレーズ感等の観点を基に分析します。以上を踏まえ5歳児の音楽の聴く力とイメージにおける表現活動の相互作用が、音楽感受能力の向上に及ぼす効果について検証し、幼児の表現における可能性を再考します。

(文責：坪井眞里子)

「近代日本における音楽教育の変遷をふまえた

今の日本に必要な音楽・音感教育のあり方Ⅱ ―グローバルな視点から現在の音楽教育を捉えて―」

本年度は、近代日本における音楽教育の変遷をふまえて、日本の音感教育および音楽教育について調べてきましたが、来年度は継続して、グローバルな視点から日本の音楽教育を捉える研究を行う予定です。

昨年末に、絶対音感研究の世界的権威である宮崎謙一氏の論文が米国の「ミュージック・パーセプション (Music Perception)」

稲木真司(代)・佐々木基裕
誌に掲載されましたが、その研究結果を見ても、日本において相対音感の教育が必要であることは明らかです。幼少期に特別な訓練をしなければ身につかない絶対音感に対して、年齢に関わらず訓練すればだれでも身につけることのできる相対音感の訓練を、どのように日本の音楽教育に取り入れることができるのか今後研究していきます。(文責：稲木真司)

総合科学研究所主催 平成30年度大学講演会（平成30年9月20日）

「女性のキャリア教育と就職支援について」

講師：磯野彰彦氏（昭和女子大学 キャリア支援センター長兼キャリア支援部長
グローバルビジネス学部ビジネスデザイン学科教授）

大学の真の実力とは何でしょうか。今年度の講演会では、就職率が8年連続女子大1位（卒業生1,000人以上）である昭和女子大学でのキャリア支援について話して頂きました。昭和女子大学では手厚いキャリア支援が行われており、同じ女子大学での支援の在り方は参考になる部分も多くありました。特徴の一つが、「社会人メンター制度」です。社会で活躍している女性の先輩から助言が得られる場を設け、その先輩の姿から卒業後の自分を見つけることで、学生が夢に向かう力にしています。大学の力は、学生が夢に向かって力を伸ばせることだと感じました。この講演が、名古屋女子大学の力を再確認し、学生の夢に向かう力へのより力強い後押しにつながることを期待しています。（文責：吉川直志）



平成30年度 大学講演会

総合科学研究所「開かれた地域貢献事業」

「開かれた地域貢献事業」に参加して

瑞穂保健センターとの交流事業「若返りきらきらセミナー」
「作ってみよう♪世界に1枚！自分だけのTシャツ作り」

ボランティアに参加する機会があまりないので、最初は心配でしたが、参加者の皆さんがとても陽気にお話をしてくださったので、2時間があっという間でした。デザインを決めるときには、イメージを聞いたり、好きなものや色を聞いたりして、理想を実現できるように努めました。製作後の皆さんの発表を聞いて、工夫を凝らした作品が多く、勉強になりました。ボランティアでしたが、こんなに充実した時間を過ごすことができて、参加してよかったと思いました。



自分だけのTシャツ作り

短期大学部生活学科1年

瑞穂児童館との交流事業「親子で楽しむ音楽あそび」

乳児・幼児と保護者を対象に、音楽を聴いて身体を動かしたり、手作り楽器を演奏したりする活動を実施しました。

発達段階によって異なる子どもたちの反応を見て、私たちも楽しくこれまでの学びの成果を実感しながら取り組むことができました。また、子どもや保護者の声に耳を傾けることで、活動に一体感を味わえました。

ワークショップでの活動を通して学んだ事を、実際に保育現場でも活かしていきたいと思っています。



親子で楽しむ音楽あそび

文学部児童教育学科4年

1 名古屋市瑞穂保健センターとの交流事業

平成30年10月～平成31年2月

平成30年度 一般介護予防事業

「若返りきらきらセミナー」

「世界に1枚！自分だけのTシャツ作り」「懐かしい童謡や唱歌を歌おう」「健康に過ごすためのストレッチとエクササイズ」「オリジナルシリアル作り」「高齢期の食事を見直そう」

2 名古屋市瑞穂児童館との交流事業

クリスマスイベント

「第10回 みんなでメリー・クリスマス！」

平成30年12月8日(土)・9日(日)

「クリスマスのオーナメントクッキー作り」「みんなでクリスマスを楽しみましょう！」「クリスマスパーティーがはじまるよ/サンタさんとメリークリスマス」「クリスマスのペーパークラフトをつくろう！」「音であそぼう」

交流事業の各種講座

平成30年10月～平成31年3月

「おかあさんやおとうさんといっしょに歌で遊びましょう！」「からだであそぼう！」「親子で楽しむ音楽あそび」「[プロگرامミン]でかんたんアニメーションを作ろう！」「紙を使って思いっきり遊ぼう！」「おいしく食べて健康に 楽しく作ろう オリジナルシリアル作り」「よくかむおやつを作ろう！」「木材(ヒノキ)を利用したおもちゃ作り」「みんなで笑顔になっちゃおう！お絵かきモーニングトースト作り」「ちょうど良い食事の量ってどれくらい？～1日分のご飯を作って食べてみよう！～」「乳幼児の食育相談」「音であそぼう」

3 名古屋市瑞穂区役所との交流事業

平成30年8月22日

平成30年度「育休復帰応援講座 時短レシピでクッキング！」

今年度運営委員

委員長	森屋 裕治 MORIYA Yuji (短期大学部)	伊藤 充子 ITO Mitsuko (文学部)	河合 玲子 KAWAI Reiko (短期大学部)
	羽澄 直子 HAZUMI Naoko (文学部)	山田 久美子 YAMADA Kumiko (家政学部)	

研究所メンバー

所長	渋谷 寿 SHIBUYA Hisashi	顧問	河村 瑞江 KAWAMURA Mizue	主任	吉川 直志 YOSHIKAWA Tadashi
教授	越原 一郎 KOSHIMURA Ichiro	職員	寺島 まり子 TERASHIMA Mariko	職員	牧野 弘実 MAKINO Hiromi

編集後記

ここに総合科学研究所だより第28号をお届けいたします。このだよりを見ると、この1年も様々な分野で多くの研究や事業が行われたことが分かります。それぞれが専門とする研究が集まって、総合科学研究所の研究となっています。研究のつながりや融合がここから始まり、さらに未来へとつながっていくことを期待しています。ご執筆頂きました関係者の皆様には感謝申し上げます。地域貢献事業では多くの先生方にご参加頂き、さらに本年度の事業にも研究所の活気が引き継がれています。今後とも、総合科学研究所の活動にご期待頂き、ご協力をお願いいたします。（文責：吉川直志）